

るか、農民となるか二者択一を迫られたのである。

第三節 宇都宮鎮房の挙兵

肥後の国一揆

天正十五年（二五八七）九月、肥後において大規模な国人一揆が起こった。秀吉はこれに重大に考えた。放置すれば一揆が九州全域に波及し、秀吉が再度九州へ下向しなければならぬような事態が生ずると考えたのである。十月二十一日、秀吉は諸方面へ佐々成政の失政を強調する書状を發し、秀吉の吏僚たちに警鐘を鳴らした。その内容は、

佐々成政へ肥後一国を預けていたが、国人たちへ所領安堵の朱印を与えていたのに、成政は領地を渡さなかつた。百姓たちへも、生活できるよう配慮すべきところ、来年行えと言つた検地を強行し、さらに新たな課役などを懸けたので、一揆を起こさせてしまった。秀吉は唐・南蛮までも出かけるつもりだから、九州の事は五畿内同然に治めなければならぬので、毛利輝元をはじめ、中国衆を直ちに派遣する。それで鎮まらないときは、弟の大和納言秀長や養子の秀次、宇喜多秀家、さらに四国の者を送るつもりでいる。

というもので、九州に配置された大名も、肥後へ向けて出張した。黒田孝高も兵を率いて久留米まで出動していた。

豊前の国一揆

十月朔日、孝高の留守中、子息の長政の拠る馬ヶ岳城へ、各所で国人が蜂起したという知らせがあり、直ちに、長政は久留米の孝高へこれを告げ、自身は兵を集めて上毛郡へ出動を攻略して、馬ヶ岳城へ帰り、城井鎮房の籠もる鬼ヶ城を二〇〇〇余の兵をもって攻め敗北した。長政は神楽山に向城を築き、三五〇人ほどを置いて、城井の往来を塞いだ。この間に、宇佐・下毛・上毛三郡の国人が挙兵し、犬丸・加来・福島などの城に立て籠もった。

長政は馬ヶ岳より広津城へ出馬し、鬼木・伊藤田・中尾・緒方らの国人が広津に押し寄せる形勢にあったので、逆襲して上毛郡観音原（大平村）で、鬼木掃部を討ち取り、十一月七日、如法寺庄河底で、城井宗永の被官円藤源兵衛を討ち取った（『津野田文書』）。

やがて、伊藤田・中尾（下毛郡）・山田大膳・山田常陸介・八屋刑部（上毛郡）らが滅ぼされた（『黒田記略』）。

天正十五年十月二十二日付の秀吉の書状は、

一、野仲・城井兩人の奴原申し合せ、豊前上毛郡野仲古城へ罷出候により、中通り一揆等も少々蜂起せしめ、黒田勘解由・森老岐守、豊前へ打帰るの由、聞きしめされ候、輝元着陣たるべく候、相談をとげ、かの古城討果し、一揆撫切りに申付くべく候

と小早川隆景へ豊前一揆の状況を告げ、中国勢の再出陣を命じている。この時、野仲左京は長岩城（第5図参照）に、野仲兵庫（鎮兼）は雁股山に立て籠もったが栗山四郎右衛門に命じて攻め滅ぼしたという。

十一月十一日、羽柴秀長は森吉岐守へ、黒田孝高の失政が問題となつたことを次のように伝えている。

一、一揆言語道断の所行、黒官兵仕やう悪二よつて、かくの如く猥りの由風聞し候、その方の儀、先書ニ申し候ごとく、取沙汰これ無く候間、いよいよ嗜専用二候

しかし、毛利吉成の領地田川郡若石城でも一揆の者が立て籠もり、吉川広家勢の加勢を得て攻略した。結局、黒田孝高も責任の追及を免れた。

佐々成政は豊臣秀吉の吏僚に対する「見懲」（『立花文書』）しめとして、肥後一国の知行を取り上げられ、切腹させられたのである。秀吉はこうしたパフォーマンスを得意とし、諸武將の失策を執念深く覚えていて、改易の恐怖に晒しながら、自分への忠誠を励ましめた。

城井城攻略ならず

十二月十日、「城井が事、取詰め、落居幾程あるべからずのよし、尤に候、…自今以後、見懲しめのため候の間、一人も遁さず、責め殺すべく候」と秀吉は吉川広家に命じているように、城井城攻略にてこずっている（第6図参照）。

十二月十二日ごろ、下毛郡の犬丸城が陥落し、数百人が討ち果たされて首が京都へ送られた。続いて、十二月二十一日までに、賀来城・福島城が陥落して、首が京都へ進上された。



第5図 野中鎮兼の長岩城跡（耶馬溪町津民）

『吉川文書』によると、岩石・城井・賀来・福島の一揆などをことごとく討ち果たし、広津城で越年し、正月十日、吉川広家は長門一宮に帰陣したという。豊前一揆は天正十五年末には鎮定されたということになる。城井鎮房は、小早川隆景ら中国衆の調停に応じ降伏したという。

天正十六年（一五八八）八月、長野三郎左衛門尉（鎮

辰）・原田五郎（信種）・草野中務大輔（鎮水）の三人が肥後へ移され、肥後の城十郎太郎を筑前国内で八〇町、伯耆左兵衛尉に五〇〇町が与えられて本貫の土地を離された。

なお、寛永四年（一六二七）十二月十四日付の『益永文書』によると、「天正十五〇〇月のころ城井、野中兩人、一揆ヲ相企て候、宇佐において、益永民部少輔・弟令官九郎・祝^{ほり}対馬太夫・万徳坊・小山田左近・地下五人、この外數十人、組仕り候、それにつき、彼党類同苗親類、残らず相果たされ候」と宇佐郡でも一揆が起こっていた。

城井鎮房を暗殺

城井鎮房の最期はいろんな伝説となつて語り伝えられているが、『黒田家譜』は、黒田家にとって都合の悪い部分は潤色していると考えられるけれども、次のように述べている。

国中の敵共がようやく滅んだため、城井鎮房も敵対しがたく思ったか、小早川隆景・毛利壱岐守・安国



第6図 城井氏の奥城
鬼ヶ城の城門（築城町）

寺惠瓊に頼んで、罪を謝し、孝高の旗下に属さんことを乞い、人質を差し出すと詫びたので、降参を許した。孝高は人質として子息弥三郎と息女を取った。

その後、孝高が肥後へ出かけた留守中、鎮房が、突然、手勢二〇〇ばかりを連れて中津城に出てきた。長政は、この機会をとらえて鎮房を誅すことを家臣と議し、暗殺した。その後、鎮房の家来の追ひ払いを命じ、城門の内外で、切り合いがあり、多数が討ち取られ、城井谷へも少数の者が逃げ帰って、この報が伝えられた。長政は、やがて寒田へ押し寄せ、館を焼き払い、鎮房の父長甫以下一族一三人、中津川に磔はりつけにされ、子息弥三郎は孝高に従って肥後に行っていたが、かの地で誅せられた。

貝原益軒は、鎮房の息女を長政の室としたという話を虚説として斥しりぞけている。城井鎮房と叫び起り、させ、二カ月後に誘殺したのは、秀吉が指示した策であろう。天正十六年正月、肥後国一揆が再び起こり、毛利輝元を出陣させ、これに小早川隆景・黒田孝高・森吉成に加勢を命じ、京都より、小西行長を派遣して、軍監とし、秀吉へ状況報告させている。このころの秀吉は、事細かに報告させ、秀吉の指示を仰がせているからである。